公開制作、ワークショップがもたらす「そうぐう」

アートの現場から ACAC通信

小学生の絵画と黒板画を講評するOJUN（7月25日）

7月16日から青森公立大学国際芸術センター青森（ACAC）ではじまった景観観察研究会「八甲田大学校」。アーティストと研究者による滞在制作と、その成果展示だけに終始するのではなく、自然の複雑さや創造性を学び合うワークショップやトークなどがほぼ毎週行われ、それらのイベントによって生み出された作品や試作品、誰かがいて何かをした痕跡が展示自体を常に変化させていく。

ACACはアーティスト・イン・レジデンス（AIR）のプログラムを中心とした、国内でも数少ない滞在制作のために構想、設計された施設である。しかし今回、画家のOJUNによってこれまで類を見ない公開制作が行われている。その名も「そうぐう」。Oさんは約2ケ月の会期中、やむを得ない所要を除き、ギャラリーA……の中で他の作品に囲まれながら、まるでそこが最初からアトリエであったかのように画材を広げ、朝から夕方ごろまで規則正しく制作している。長辺が3メートル以上もあるキャンバスが2枚、その他にも木製の板が何枚も壁にかかっている。何も考えていないように見える線でも、実は何日もかかって悩み抜かれた結果だったりする。完成しているように見える絵も、数日後に加筆されていたりする。一枚の絵がどのように描かれるのか、かつてこんなに意識させられたことがあっただろうか。

画家は、場所があり人が来ることによって偶然起こった出来事を、貪欲に創作へ取り入れようとする。ワークショップも参加者という他者の不確定要素を取り入れながら、自分ひとりでは気づかないことに遭遇し合う試みと言えそうだが、Oさんと、東京大学大学院でバイオテクノロジーの研究を行う山下港による視覚考現学研究室「見えない世界を冒険する―記録集と黒板画の制作」、そして小学生の職業体験アトラクション「ジョブキッズ」内で行った「人の絵の続きを描く！」でも随所にそのことが感じられた。

「八甲田大学校」というオンサイトの活動も、日々動きがあり充実しているACACであるが、様々なプロジェクトが同時進行しており、それらは展覧会という形態に留まらない。昨年度からはじまった南イタリアとの交換派遣AIR「エナジー・イン・ルーラル」では、アーティストの三原聡一郎（2019年に実施したAIR「はかなさへの果敢さ」に参加）とキュレーターであり本プロジェクト共同企画者である四方幸子が、7月にそれぞれ約1ケ月と2週間、南イタリアでリサーチと滞在制作を行い、芸術祭「リミナリア」に参加した。また、8月下旬には「表現のコモンズ」の一環として行っている野外彫刻のプログラムでアーティストの津田道子が再び滞在し、市民・学生の方々と青森市内の野外彫刻に関するオーディオガイドを制作する予定だ。

（青森公立大学国際芸術センター青森学芸員　慶野結香）